

◇ 卷 頭 言 ◇

浅 海 重 夫

年々わずかずつではあるがどこかの国立大学に、講座増設や学部学生の増募が認可されている。私大でも一挙に数十名の学生増募とか学部の新設などの例をきくことがある。お茶大文教育学部にも、新年度から講座1つと学生5名の増加が認められた。これは複合学部の発展的解消を目指す数年来の要求とは別の、外国文学科充実に向けられた拡充であるが、拡充そのものは大学として歓迎すべきものと受けとめねばならない。

しかしここでいささか反体制的な言辞を弄し、わが国の大学教育の拡充について配慮すべき問題点を2つ指摘したい。まず第1に、世の中に学生がふえるということは無責任な大人がふえることであり、結果として社会悪の種が増すことを憂慮するのである。昔は(戦前は)……という年寄りの口ぐせになるが……高等小学校や中学を出ると男は極く一部の進学者を除いて就職するか家業を継ぎ、娘は嫁に行くのが普通であった。彼等は社会人とし家庭人として直ちに責任の伴う立場についたわけである。学生は自らも認めているように社会に対して半人前である。今や15~6才の中高校生さえ身体は大人なみ、知恵も大人なみで、行動だけは無責任な子供なみという厄介な存在になってきた。反社会的な行動に出る者はまだ極めて少数であろうが、大学がふえ大学生が増加するにつれて、予備軍としての中高生はさらにふえてくる。しかも受験準備に追われ徳育訓練の機会を犠牲にされた中高時代を終えると、大学という勝手気ままの自由の日々が待っている。かつて元某首相が、大げさに言えば日本はやがて大学出ばかりの国になるだろうと放談したのを覚えているが、首相たるものまさか無責任な発言ではなかろう。日本の教育施策の推進と日本人の知的水準の高揚を唱えた姿勢とうけとられたが、大学の学生収容力をそれほど拡張できるのかの疑問とともに、一面、上にのべたような危惧を感じた次第であった。

第2の点として、大学における教育内容と大学の使命を再考しなければならないという問題がある。大学は元来学理の究明を目標とした研究と教育を行うところである。しかし学生がふえると研究者養成は大学の使命の一部でしかなくなる。研究者志望のむきは大学院に進めばよいが、他の大多数の学部学生にとって、大学とは教養を高めることと就職を有利にすべく卒業証書を入手することのためである。あるいは交友を求めると答える学生も多いようだ。この程度なら我慢もできるとして、第1の問題点とも一致することであるが、大学に入ったらさあ安心とばかり人生の難関はすべて終った心境で、これから大いに遊べるぞと放言する者さえ出てくるのは困ったことである。一方マスコミの報ずる有名人のこぼれとして、自分は大学では勉強などしなかった、好きなことばかりやっている劣等生でしたよ、それでも……(このように偉くなれるのだと言外におおす)と昂然とうそぶいたりあるいは皮肉まじりの放言さえする。大学人にとってこの2種類の放言は全くやりきれない。大学でなまけても大成する人は極めて少数の才人で、多分大学に入らなくても成功したに違いない。大部分の一般人はやはりそうはいかないのに、多くの学生に大学で真面目に勉強するのは馬鹿げているとの錯覚を起させている。そこで学部学生の教育内容をいかにすれば、多数の学生に魅力ある大学として、将来とも存在意義をもちつづけられるのだろうか。今のところ、それぞれの学部学科のカリキュラムをコアとして、高くかつ幅も広い教養を身につけ、社会人とし家庭人として豊かな人生を送れるようにと願いをこめて、学生と接すること位の平凡な結論しか引き出せない。